

# 様々な世代が交流し合って暮らす。 コレクティブハウスという 新しい住まい方。



理事 宮前 真理子

現在、東京には一人暮らしの世帯が50%を超えている区もあるという。しかし、公的機関による賃貸住宅は2LDK等のファミリー用がほとんどで、単身者用の住居は不足しがちな傾向にある。そこに不況によるリストラが重なり、都市で働く若い単身者にとって、高額な家賃が経済的に重い負担となっている。また、晩婚化による単身世帯の増加が顕著になる一方で、広い家にたった一人で暮らす高齢

者もかなりの数にのぼる。そういった意味で、日本の都市の住宅状況は非常にアンバランスな状態になってしまっている。

こうした住宅インフラの偏りを、新たな仕組みでカバーしようとする民間のNPO法人がある。その一つが「コレクティブハウス」という、1970年代に北欧で生まれた、集合住宅の新しい住まい方を日本で実践している「コレクティブハウジング社」だ。

コレクティブハウスとは、複数の世帯がそれぞれ独立した住戸に住みながら、ダイニングキッチンや庭等の共用スペースを活用し合う賃貸の集合住宅だ。この共用スペースを核として、単身者やファミリー等様々な世代の住人達がお互いに交流しながら支え合って暮らす。個人のプライバシーは守りながら、共同でできることは

一緒に言い、暮らしの省力化や合理化等、その可能性を広げようとするものだ。

たとえば食事なら、週に3回程の夕食は他の住人の分もまとめてつくり、共用スペースのダイニングで一緒に食べることもできる。調理は当番制になっており、毎月1回程の割合で、すべての住民が担当する仕組みだ。月1回の決められた当番を担当すると、他の住人が当番の日は希望すれば誰でも食事を食べられる。もちろん強制ではないので、外食しても自室で食べるも構わない。さらに共用スペースの掃除からハウス運営のグループ活動にいたるまで、住人の総意で様々な役割が設けられている。家事の負担を軽減し、共同で住むメリットを最大限に活かそうという住まい方である。

コレクティブハウジング社では、



## 北欧生まれの新しい集合住宅を 東京の住宅インフラとして実現。



### コレクティブハウスを企画、コーディネートする 「コレクティブハウジング社」

単身者やファミリー等、様々な世代の人達が協力し合うことで、集合住宅に暮らしを自主運営するコミュニティが生まれる。北欧生まれのこの新しい住まい方を日本で実践し、広めているのがNPO法人「コレクティブハウジング社」だ。コレクティブハウジング社が提唱する新しい集合住宅とはどのようなものか。住民や賃貸オーナーにはどのようなメリットがあるのか。都市の新しい住宅インフラとしての取り組みを追ってみた。

NPO法人コレクティブハウジング社 ホームページURL <http://www.chc.or.jp/>



2003年に東京の日暮里で日本初のコレクティブハウス「かんかん森」をスタートさせ、0歳から82歳まで40人近くが暮らす、新しい生活の場を誕生させた。以来「スガモフラット」、「コレクティブハウス聖蹟」と、現在まで三つのコレクティブハウスを企画し、実現させてきた。

「私達は、都市に住む孤立した一人暮らしの人達に対して、経済的にも、精神的にもサポートできる新しい環境が今こそ必要だと考えています。隣の住人の顔も知らないような住まいではなく、住人同士が緩やかなネットワークを持ち、豊かなコミュニティと合理的な暮らしを育める。そんな暮らしを提供していくのが私達の役割だと考えています。最近では、コレクティブハウスの考え方を理解し、賛同していただけるオーナーさんも増えてきて、その可能性はこれからさらに広がっていくものと期待しています」と、NPO法人コレクティブハウジング社理事の宮前真理子氏。

実際、自分の所有している家やマンションに一人で暮らしているオーナーも多い。こうした方々の家やマンションをコレクティブハウス用に改造できれば、オーナーにとっても安定した賃貸経営が見込める。住む人、貸す人、それぞれが協力して豊かな住環境をつくらうというのもコレクティブハウスの理念だ。

都市に住む人達のライフスタイルは日々変化している。それに合わせて住まいにも新たな選択肢が求められている。コレクティブハウジング社は、そうした時代の新しいニーズに応えるべく、都市の新しい住宅インフラを独自に創造しているといえるだろう。